

に活動資金を外部の国際援助機関に頼るものであれば、NGOはその活動の方向性を国際援助機関の意向にそったものへとシフトさせていく。グラミン・グループのようにソーシャルビジネスによる利益を活動の財源とするのであれば、投資家の動向は無視できないものとなる。アルンダティ・ロイは社会的不正を訴える役割を担ってきたインドの NGO が、企業や財団から莫大な資金援助をうけることによって、その活動を形骸化させていったことを指摘している [ロイ 2012]。本書では資金源の一つとしてワクフを取り上げており、ムスリム NGO の独自性を理解する上で大変意義深い指摘がなされていることは上記のとおりである。ワクフを財源とすることはムスリム NGO の特徴の一つであるが、それによって活動になんらかの制限がかかる可能性は否定できない。例えば、ワクフを財源として、イスラームの信仰に根ざしたかたちで活動するムスリム NGO は、クリスチャン・コミュニティを支援することができるのであろうか。バングラデシュにおいては、キリスト教系の NGO がクリスチャン・コミュニティを優先して支援したといった事例は枚挙にいとまがない。そのことに対する価値判断は立場によって異なるが、ムスリム NGO が何に財源を求めていくのか、逆にどのような組織や個人がムスリム NGO への支援をおこなっているのかを明らかにしていくことは、今後のムスリム NGO の動向を理解する上で意義のある試みであると考ええる。

以上の指摘は、あくまでも NGO 論的視座からムスリム NGO に関する今後の研究課題を共有するためのものである。ムスリム NGO の活動を考察することによりイスラームへの理解を深化させた本書は、まぎれもなくイスラーム研究の名著である。それと同時にムスリム NGO の活動をイスラームの教義や実践から再検討した試みは、NGO 研究にとっても魅力的な分析方法であり、新たな研究領域を示唆しているといえる。上記の課題はそのことを念頭においたものであり、また、すでに筆者が他稿で論じているものがあることを最後に書き記したい。

<参考文献>

コーテン、デビッド 1995『NGO とボランティアの 21 世紀』（渡辺龍也訳）学陽書房。

重富真一（編）2001『アジアの国家と NGO——15 カ国の比較研究』明石書店。

子島進・佐藤規子 2001「第 4 章 パキスタン」重富真一（編）『アジアの国家と NGO——15 カ国の比較研究』明石書店、pp.113-134。

ロイ、アルンダティ 2012『民主主義のあとに残るものは』（本橋哲也訳）岩波書店。

（日下部 尚徳 大妻女子大学文学部専任講師）

小杉泰『9・11 以後のイスラーム政治』（岩波現代全書）岩波書店 2014 年 272 頁

誰しも刊行を待ち望んでいる本があるものだ。

評者にとって、本書はそんな待望の書物であった。なんと言っても、我が国のイスラーム政治研究のパイオニアである著者の手による、中東政治・イスラーム政治論が久しぶりに刊行されるというのだから、一日千秋の思いでいた。

本書は、タイトルにあるとおり、2001 年 9 月 11 日に発生した同時多発テロ事件以降のイスラーム政治のダイナミズムが、極めて明快なタッチで描かれている。9.11 事件から約 13 年、その後米国が主導した「対テロ戦争」とイラク戦争から約 11 年、「アラブの春」から約 3 年半、イスラーム

政治はどのように変化し、いかなる状態にあるのか、それを多面的に理解する絶好の書である。

改めて紹介するまでもなく、著者は中東政治研究とイスラーム政治論のパイオニアであり、泰斗である。地域研究の立場からイスラーム政治思想を分析することに力を入れ、政治思想研究に加え、中東をはじめとするイスラーム世界における政治の実態についても幅広い研究蓄積がある。なかでも、著者の代表作のひとつは、法学博士号を取得した『現代中東とイスラーム政治』(昭和堂1994年)であろう。著者はここで、「西洋型モデル」と対比させることによってイスラーム政治の基本概念を浮き彫りにし、我が国の学界に大いなる衝撃を与えた。そのことが評価され、1994年度のサントリー学芸賞を受けている。

実は、それよりもはるか昔から、著者はイスラーム政治の重要性に着目していた。あまり知られていないことだが、著者は、カイロ在住中に加納吾朗というペンネームで『イスラームの挑戦』(講談社、1982年)という書物を上梓している。これは評者が生まれた翌年にあたるのだが、この書評原稿を書くにあたって久しぶりに読み直してみると、非常にビビッドな記述と現在にも通用する質の高い分析にであり、ただ驚嘆するばかりである。古本市場で入手可能であるから、本書と合わせてぜひ手に取っていただきたい。

それ以降長きにわたり、我が国のイスラーム政治研究を牽引してきた著者が1998年に刊行した『イスラーム世界』(筑摩書房1998年)は、イスラーム復興のダイナミズムを様々な分析概念と豊富な事例とともに紹介した書物だ。何を隠そう、評者はこの本に相当感化されて研究の道に足を踏み入れたのである。さらに、編者として『イスラームに何が起きているのか』(平凡社増補版2001年)、共編者として『現代イスラーム思想と政治運動』(小松久男と共編、東京大学出版会2003年)などの研究成果を発信し続け、2006年にはその集大成として、928頁にもものぼる『現代イスラーム世界論』(名古屋大学出版会、2006年)を上梓した。その他、原典の翻訳や論文も多数ある。

こうした数多くの仕事のなかで、著者は一貫して西洋をモデルとした近代化パラダイムの眼鏡を通した中東政治・イスラーム政治の分析を脱構築し、イスラーム世界に内在的な論理(あるいは地域の論理)で説明することを試みている。その結果、多数の新しい概念が紡ぎだされてきた。一例を挙げるならば、「イスラーム復興」「政教一元論」「教経統合論」「思想の市場メカニズム」「イスラームの現地化」「イスラーム化／現地化」「脱イスラーム化／外在化」「再イスラーム化／現代化・グローバル化」「3つのベクトル論」などである。これらは、我が国における中東政治やイスラーム政治の理解に大きく寄与した。言うまでもなく、本書にもその精神は引き継がれている。

著者の書物が奥深いのは、中東政治やイスラーム政治論をもとと専門にしながらも、歴史や社会文化、経済に至るまで、幅広い知識に裏付けられているからであろう。その証拠に、著者の研究対象は非常に幅広い。たとえば、イスラームそのものを正面から扱った『イスラームとは何か——その宗教・社会・文化』(講談社現代新書1994年)や『イスラーム——社会生活・思想・歴史』(新曜社2006年、江川ひかりとの共編)、『クルアーン——語りかけるイスラーム』(岩波書店2009年)にはじまり、イスラーム史をジハードや国家といったテーマからビビッドに描いた『イスラーム帝国のジハード』(講談社2006年)や『イスラームの歴史<2>——イスラームの拡大と変容』(編著、山川出版社2010年)、『イスラーム——文明と国家の形成』(京都大学学術出版会2011年)などに広がっている。それに加え、昨今、我が国でも注目を浴びるようになったイスラーム経済論についても、『イスラーム銀行——金融と国際経済』(山川出版社2010年、長岡慎介との共著)で分かりやすく解説している。

こうした研究レンジの広さには、ひたすら敬服するばかりである。細かい実証研究と、それに立脚

した鳥瞰的な議論を同時に展開できる学者は、極めて限られているが、著者はまさしくそうした稀有な存在に違いない。本書にも、こうした幅広い研究から得られた知見が、随所にちりばめられている。

まず、本書の出発点となるのは、9.11 事件はイスラーム政治が世界政治と密接に結び付く契機となり、その結果、イスラーム世界が国際政治の動向に影響を受けやすくなったと同時に、それに大きな影響を及ぼすようになった、という議論である。言い換えると、これまでイスラーム世界内の問題であったイスラーム復興現象が、9.11 事件によってイスラーム世界に限定されなくなった、ということである。

この議論は、9.11 事件以降に出版された『現代イスラーム世界論』で多少は展開されているが、本書ではこの議論がより前面に出されている。興味深いのは、イスラーム政治論からみると、9.11 事件はアルカイダがこれまでのジハード概念を大きく転換させた出来事だった、という指摘だろう。アルカイダは、従来のイスラーム世界を守るための「防衛的ジハード」を、非イスラーム圏まで攻め込む「攻撃的ジハード」に転じた。これが「グローバル・ジハード」と呼ばれるものになった。さらに、ジハードを連帯義務から個人義務へと転換させたことで、グローバルな人間の動員が可能となった。こうして、グローバル・ジハード主義が台頭したというのだ。

その結果、米国が主導する「対テロ戦争」が始まったことは周知の事実だが、著者は、この「対テロ戦争」こそがアルカイダの「ブランド化」に寄与したのだと論じる。つまり、「対テロ戦争」が進められたことによって、アルカイダはその実態よりも強固な組織であると考えられるようになったのだ。

「ブランド化」したアルカイダは、反米思想の受け皿になった。反米思想の広がりをも促進しているのは、言うまでもなく「対テロ戦争」がもたらした歪みである。具体的には、西洋でみられたイスラモフォビアや、民主的に選ばれたイスラーム主義政権を認めないという二重基準、そして不平等などが、「対テロ戦争」のなかで醸成され、反米思想を拡散させていったことが、活写されている。昨今急激に深刻化している「宗派対立」という現象も、以上のようなプロセスのなかで顕在化してきたものである。

著者の分析が鋭いのは、こうした現状を大局的かつ構造的にとらえ、理解する視角を提示している点である。

まず、上述のような状態は次のように整理される。つまり、20 世紀のイスラーム諸国では、西洋的近代化、ナショナリズム、イスラーム復興の3つのベクトルが存在したが、9.11 事件以降は、イスラーム世界がこうした3つのベクトルに引き裂かれて分極化した状態に陥った。分極化したイスラーム世界は、9.11 事件によって急速に世界政治と密接に連携するようになり、そのなかで「ブランド化」されたアルカイダをはじめとするグローバル・ジハード主義者が台頭し、これまでは考えられないようなタクフィール主義者（シーア派などを不信仰だと断罪する者たち）まで現れることになった。

その結果、イスラームの穏健派／中道派が苦境に立たされるようになった。と同時に、こうした状態の突破口になるのも穏健派／中道派に他ならない、という。それはなぜなのか。

これにはもちろん理由がある。その理由を、著者は「思想の市場メカニズム」という概念を使って明晰に説明していく。西洋のように、教会の権威が公会議で正統となる思想を決めていくのとは異なり、イスラーム世界では、一般信徒の支持を得た思想が生き残るという「思想の市場メカニズム」が働いている。それゆえ、グローバル・ジハード主義者の主張はやがて淘汰されることになる、というわけだ。

とはいえ、と著者は言う。9.11 事件によって、イスラーム世界の「思想の市場」が世界的な市場

と直接的にリンクした現在にあっては、この市場がまだ安定していない。だからこそ、中道派の役割がより重要になるのだ。

その例として、グローバル・ジハード主義者の台頭に対抗するように、知のイスラーム化や宗教対話、イスラーム経済などのオルタナティブを提示する中道派の動きを紹介した議論は、とりわけ興味深い。なかでも、知のイスラーム化をめぐる議論では、医療の目覚ましい発展によって、イスラーム法が臓器移植や脳死といった問題にかなり柔軟かつ迅速に対応できるようになったことが指摘されている。すぐれて現代的な問題に対する穏健なイスラーム的解釈が、人口に膾炙するようになったというわけだ。さらに、イスラームのウンマ内の学派、教派、学派の共存を目指すアンマン・メッセージ(2004年11月)の事例も興味深い。

また「対テロ戦争」で米国が力を衰退させた結果、イスラーム世界をめぐる政治が大きな影響を受けるという指摘や、政治の劣化を招いたムスリー政権の追い落としと同胞団のテロ組織化に警鐘を鳴らし、民主化こそが不義に怒る青年を減らして過激派の退場と穏健派の拡大の素地を作るという議論にも、首肯することができる。イスラーム政治の活力が、青年層の拡大という人口問題に起因する側面もあるのだから(第1章)、民主化によって穏健派の拡大の素地を作るとは、これまで以上に重要な論点になるだろう。

以上のように、本書は、これまでの長い研究のうえに展開された9.11事件以降のイスラーム政治論である。その深遠な分析は、イスラーム世界の現状と今後を理解する手掛かりとなるだろう。

さて、いわばグローバル・ジハード主義の落とし子である「イスラーム国」が台頭し、イラク第二の都市を陥落させたのは、本書が書かれた直後のことであった。この事件は世界を震撼させ、9.11事件に類似するインパクトを持つと主張する者すらいる。その後、「カリフ宣言」がなされるなど、中東イスラーム政治をめぐる動きが急加速している。そのなかで、9.11事件以降に拡大したグローバル・ジハード主義者が、その後支持を失い、「アラブの春」で中道派に取って代わられたようにもみえた。だが、「アラブの春」の「失敗」を受けて、再び急進派が勢力を拡大しているようにもみえる。「思想の市場メカニズム」に照らして考えるなら、時間をかけて揺り戻しが来ることになるのかもしれない。

一方で、「イスラーム国」の台頭は、明らかにこれまでのグローバル・ジハード主義とは異なる要素を多分に含んでいる。こうした状況の変化を、イスラーム政治研究の泰斗はどのように分析するのだろうか。本書の続編を期待せずにはいられない。

評者には、また新たに待望の書ができたことになる。

(山尾 大 九州大学大学院比較社会文化研究院准教授)

三浦徹(編)『イスラームを学ぶ——史資料と検索法』(イスラームを知る 3) 山川出版社 2013年
125頁

本書は、シリーズ「イスラームを知る」としてイスラーム地域の基本事項や旬なトピック(ムスリム同胞団、イスラーム金融、ムスリムとキリスト教徒の共生など)を一般向けにわかりやすくまとめたブックレットの一つで、「イスラーム地域の諸事情について知りたい、学びたいという人のための道案内」として刊行された。こうした「イスラームの～を知る」といった入門書は今では珍